

# 小 論 文

教育学部 学校教育教員養成課程（初等教育コース・特別支援教育コース）

## （本 試 験）

### 注 意 事 項

1. 「解答始め」の合図があるまでこの冊子は開かないこと。
2. この冊子は表紙を除き4ページである。
3. 「解答始め」の合図があったら、まず、掲示又は板書してある問題冊子ページ数・解答用紙枚数・下書き用紙枚数が、自分に配付された数と合っているか確認し、もし数が合わない場合は手を高く挙げ申し出ること。次に、受験番号・氏名を必ず解答用紙の指定された箇所に記入してから、解答を始めること。
4. 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に横書きで記入すること。
5. 解答用紙は切り離さないこと。

下の文章を読んで、次の各問いに答えなさい。

### 問 1

「考えること」としての哲学を、筆者はなぜ必要だと考えているか。「対話」「自由」という言葉を必ず用いて、100字以内で説明しなさい。

### 問 2

「考えること」を学ぶ機会は、学校においてどのように実現することができるか。自分の体験も含めて、あなたの考えを述べなさい。(600字以上1000字以内)

#### 哲学＝「考えること」の難しさ

「知識」ではない「体験」としての哲学とは、「考えること」そのものを指す。より厳密に言えば、「問い、考え、語ること」である。そして一人で考える時、私たちは自分に問いかけては答え、それを繰り返す。つまり思考とは自分自身との「対話」なのだ。そして対話であれば、語る相手、つまり「聞く」人がいる。一人で考えている時、この聞き手は自分自身であるが、それは潜在的には他者である。

したがって「考えること」は、他の人との対話、「共に問い、考え、語り、聞くこと」であると言える。哲学とは、このようにごくありふれた、きわめて人間的な営みである。それは簡潔に「共に生きること」と言い換えてもいいだろう。互いに「問い、考え、語り、聞く」こと——そのような共に考える営みとしての哲学は、人が生まれた直後から始まり、まさに人と人が共に生きていくことそのものなのである。

なあんだ、そんな当たり前のことか。だったら、わざわざ「哲学」なんて呼んで、もったいぶることなんてないじゃないか、と思う人もいるだろう。しかし、生きるうえで必要なことなら何についてでも言えることだが、何もしなくてもただ自然に任せておけばできるようになるわけではない。「考えること」も、それなりの環境の中で身につけ、いろんな経験を経て上達していく。

言葉だって、まずは親や周囲の人とのやり取りを通して学ぶ。人前で堂々と話すとか、面白い話をするとか、分かりやすく話すとか、誰でもはじめからできるわけでは

なく、それなりの訓練や経験が必要だ。そういう機会に恵まれなければ、大人になっても大してできなかつたりする。「考えること」も同じである。

「哲学」というと、普段の生活から切り離された、多くの人には縁遠いものに思われるが、「考えること」そのものとしての哲学は、ごく当たり前の身近なところから始まっている。

ところが、この「考えること」は、一見当たり前のようであるが、実はそうではない。日常生活の中では、ほとんどできないと言っていいほど難しい。むしろそれができないこと、「考えないこと」が当たり前となっていて、そうだと自覚されていないのだ。

いやいや、「考える」なんていうことは、誰もいろんなところで学び、身につけているのではないか。家庭で、学校で、会社で、私たちは「よく考えなさい！」と言われる。私たちはたえず考えているのではないか。

しかしいざ「考えて！」と言われても、何をどうやって考えればいいのか。しばしば「頭を使って考えろ！」と言われるが、頭をどうやって使えば考えられるのか、どのように考えたらいいのか、その方法をいったい誰がいつ、教えてくれるのか。

ところが驚くべきことに、私たちが「考える」ということを学ぶ機会、人生においてほとんどない。家庭でも、学校でも、会社でも、「考える」という、人間にとってきわめて大切で、誰にでも必要なことを、私たちは学ばないのである。

何事であれ、学ぶためには、「やり方」を知らなければいけない。さらに、「習うより慣れろ」と言われるように、とにかくたくさんやってみなければいけない。だが「考える」ことに関しては、いずれのチャンスも私たちには与えられていない。

学校のことを思い出してほしい。私たちが教わるのは、個々の場面で必要なルールを身につけ、その中で決められたことに適切な答えを出すことだけである。いろいろやってみるというより、決まったことを繰り返す。それは「考えること」とは違う。少なくともここで言う「問い、考え、語り、聞く」という、対話的な意味での「考えること」ではない。

そこに自己との対話はなく、まして他者との対話など望むべくもない。ただ出された指示に従うこと、教えられたことを教えられた通りに行うことが重視される。それに習熟することで、「よく考えなさい！」と言われた時に期待されている「正解」が

出せるのだ。

それはむしろ「考えること」とは反対のこと、「考えないようにすること」ですらある。「考えること」が「共に考えること」であり、「共に生きること」だとすれば、どう考えればいいかを学ばず、ただ考えないようにさせられているということは、この世で生きるうえで必要な、何かとても大切なものを犠牲にしているか、失っていることにならないだろうか。

### 「考えること」と「自由になること」

その大切なものとは「自由」である。私たちは考えることによってはじめて自由になれる。考えることは、自分を縛りつけるさまざまな制約から自らを解き放つことである。

世の中のルール、家庭や学校、会社での人間関係、常識や慣習、自分自身の思い込み、さまざまな恐れや怒り、こだわりから、ほんの少しであっても距離をとることができる。それが私たちの生に自由の余地を与える。私たちが考えるのは、考えなければならぬのは、私たちにとってもっとも大切な自由を得るためである。

考えるなんて、いつもやっている、自分はじゅうぶん自由だという人もいるだろう。牢獄<sup>ろうご</sup>につながれていても、思考だけは自由だ。そんな考え方もある。あるいは哲学好きな人であれば、人間にはそもそも自由なんてないんだ、それは幻想なんだ、という人もいるだろう。しょせん理想にすぎないという人もいるだろう。

だが、私がここで言いたいのは、そういう当たり前のことでもなければ、幻想や理想に追いやってしまえるようなものでもない。きわめて具体的で身近な問題であって、まさしくすべての人に、子どもにも大人にも、人生の最初から人生の最後まで関わることである。

私が「考えること」を通して手に入れる自由を強調するのは、現実の生活の中では、そうした自由がほとんど許容されていないからであり、しかもそれは、まさに考えることを許さない、考えないように仕向ける力が世の中のいたるところに働いているからである。だから、自由になるためには、「考えること」としての哲学が必要なのである。

そんなことができるのかと思うかもしれない。たしかにただやみくもに考えればい

いわけではない。一人だけで頑張っても、途中で力尽きるだけだろう。しかし、共に考える「対話」としての哲学には、それが可能なのである。しかもそこでは、一人で勝手に自由になるのではなく、他の人といっしょに自由になることができるのだ。

[出典] <sup>かじ</sup>梶谷真司『考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門』（幻冬舎，2018年）。なお，出題にあたり原文の一部を改変した。また，原文（縦書き）を横書きに，読点「、」をコンマ「,」に改め，引用した。漢字表記は，送り仮名を含めすべて原文のままとし，常用漢字表にない文字には出題者がふりがなを付した。